



春座談会

社会を生きる たちへ



英語教育～

部科学省初等中等教育局視学官
めとする全国の学校に英語の指
ている直山木綿子さんをお招き
ついて語り合いました。

直山 木綿子 (文部科学省 初等中等教育局 視学官)

【プロフィール】 なおやま・ゆうこ

京都府出身。英語科教諭として京都市立中学校に勤務後、京都市立永松記念教育センター(現京都市総合教育センター)、京都市総合教育センターカリキュラム開発支援センターなどに勤務。平成21年4月から文部科学省初等中等教育局の視学官として、全国の学校に英語の指導方法の助言・指導を行う。



英語との出会い

市長 上尾市では、「進んで英語を話せる上尾の子を育てる」ことを目指して、上尾市英語力向上プランを推進しています。そこで本日は、文部科学省初等中等教育局視学官の直山木綿子さんにお越しいただきました。どうぞよろしくお願ひします。

直山 よろしくお願ひします。

市長 市内の小学校は、文部科学省から「教育課程特例校」の指定を受け、小学1・2年生から特別な教育課程として「英語活動」を実施しています。直山さんには、市内小学校の授業研究会などで指導をしていただいています。

市長 直山さんは、どのように英語に出会ったのでしょうか。

直山 小学4年生の時に近所の英会話教室に通ったのがきっかけでした。初めは何を話しているのかわかりませんでした。回数を重ねるうちに英文のルールが分かるようになりました。パズルを解くようで面白いと思います。英語が好きになりました。

市長 直山さんは、吸収力があつたのですね。

直山 教室の先生に褒められてうれしかったことも理由の一つかと思ひます。

市長 子どもも大人も、褒められると、うれしいですね。英会話教室の先生との出会いが、直山さんにとっていい影響となったのですね。

市長新

グローバル 子ども

～上尾市の

ことしの市長新春座談会は、文
として、上尾市内の小学校をはじめ
導方法について助言・指導を行っ
し、上尾市の小学校英語教育に

直山 そうですね。英会話教室が
きっかけで学校の先生を目指すよう
になりました。実際に中学校の先生
になった時は、生徒に真つすぐ向き
合うことを心掛けていました。時に
は真正面から向き合い、時には隣に
寄り添って話をしました。

市長 子どもの頃に寄り添っても
らったためよりは、大人になっても
心に残ります。私は6人兄弟で親も
大変そうでしたが、気持ちを受け止
めてもらった時とてもうれしかった
のを覚えています。



視学官への就任

市長 直山さんは現在、視学官とし
て全国の学校に英語の指導方法につ
いて助言・指導を行っています。視
学官に就任したのは、どのような経
緯だったのでしょうか。

直山 中学校の先生を経て、京都市
総合教育センターに研究員・指導主
事として勤務し、その頃から文部科
学省の小学校外国語教育に関する委
員などを務めるようになりました。
そして、平成21年に教科調査官・教
育課程調査官として文部科学省と国
立教育政策研究所に着任しました。
市長 その頃は、外国語教育の変革
期だったのではないですか。

直山 外国語教育が中学校から小学
校へ拡大された変革期でした。小学
生から英語に触れさせることには賛
否両論ありました。しかし、現代は
グローバル社会といわれ、人・物・



お金が国境を越えて行き交っています。子どもたちが社会に出た時に、母国語以外の言語を使えることが大切だと考えています。

英語で自分の気持ちを伝える

市長 上尾市では小学1年生から外国語教育に力を入れています。英語での「コミュニケーション」を楽しむことなどを通して、小・中学校9年間で継続した外国語教育を推進しています。小学校低学年で英語活動をする効果は、どのようなところにあるのでしょうか。

直山 低学年の段階で外国語教育を実施すると、英語のリズムやイント

ネーションに感覚的に慣れることができ、中学年での「外国語活動」、高学年での「外国語科」での学習がより幅広いものになると思います。

市長 低学年だと、抵抗なく学んでいる、英語で遊んでいるようですね。

直山 全身で英語を楽しんでいるのだと思います。授業の方針としても「英語を勉強する」のではなく、「英語で自分の気持ちを伝え合う」ことを重視しています。

市長 市内の小学校で実際に授業を見て、どんな印象を持ちましたか。

直山 先生が丁寧に授業をしている印象を持ちました。特に低学年の授業では、食べ物や動物などの題材を使ったため、子どもたちは身近な物か

ら自然に英語で自分の言いたいことを伝え合っていると感じます。

市長 私も英語の授業を見学しました。本当に楽しんでいる子どもたちの表情が印象的でした。先生が自作した教材を使ったりICT端末を活用して写真や動画などの視覚的な情報を充実させたりすることで、子どもたちの理解を深める工夫をしていましたね。

直山 子どもは、大人が思っている以上に伸びる可能性を秘めています。日本語でも英語でも、どの表現を使えば相手に伝わるかを考えて工夫しています。上尾市の授業は、教えずぎず、一人一人の習得状況を見極めて指導する体制になっていました。

市長 私が英語の授業を受けていた頃は、先生の話す英語を繰り返して、先生から伝えるような授業でした。その頃に比べると、現在は双方向のコミュニケーションを重視していると感じます。



小学校の授業を視察する島山市長

直山 教え込まれるのでは、かえって学習意欲が低下してしまうこともあります。コミュニケーションを取ること、自然と英語が身に付く授業を目指していましたね。コミュニケーションを取るには、目的や誰に伝えるかによって話す内容や話し方を変える必要があります。学校での英語教育では、何のために、誰に、何を伝えるのか、目的や場面、状況などの設定を明確にすることを大切にしています。

英語でのコミュニケーション

市長 市内の小・中学校では、外国語指導助手(ALT)を全校に配置し、授業だけでなく休み時間など普段の生活でも英会話ができるようにすることで、コミュニケーションを最大限に重視しています。また、英語以外の授業などにALTが参加し、子どもが外国文化を学ぶ機会を作っています。

直山 ALTが入ることにより、日本以外の文化を知ることができ、子どもたちの好奇心が刺激されると思います。

市長 また、オーストラリアのロッキヤーバレー市と友好関係協定を締結し、中学生海外派遣事業のホームステイやオンライン交流なども行っています。しかし、子どもたちの様子を見ていると、仲間内では元気

だったのに、外国人と対面すると急に緊張して会話がスムーズにできない場面がありました。

直山 即興で会話をすることが苦手という話はよく聞きます。その場で考えてその場で答えるという体験が少ないのかもしれない。

市長 会話することを難しく考えすぎているように感じました。

直山 そうですね。現行の学習指導要領でも、子どもたちに失敗を恐れず体験させることを重視するようになっていきます。

市長 私は岩手出身で一生懸命に標準語を話そうと苦労した思い出があります。英語と向き合う子どもたちと似ているかもしれません。

直山 ネイティブな英語でなくても受け入れられる「World English」という考え方があります。東北なまりの英語や、京都出身の私であれば、京都なまりの英語もあっていいのかもしれない。英語を臆することなく失敗を恐れずに会話をしてほしいです。

英語を話す機会

市長 私は、英語が得意ではありませんので、英語で話しかけられると思うように会話ができません。

直山 そうですね。英語で話すことに苦手意識を持っている人は多いように感じます。普段から英語で自分の意思を伝える練習をしておくこと

が大切です。

市長 実生活で英語を話す機会が少ないとも感じます。市内で、子どもを中心に英語で雑談できるような場があればいいと思っています。

直山 文部科学省は、授業以外に英語を使う体験を増やすことを勧めています。日本語を話すように、日常的に英語に触れられるような環境があるといいですね。

市長 上尾市は、上尾市国際交流協会と協力して約30年ワールドフェアを開催し、外国人との交流や文化に触れる機会を作っています。近隣市町では珍しい取り組みです。

直山 それはいいですね。ワールドフェアや中学校でのオンライン交流は、通常の授業と異なる体験になるため、子どもたちにとって効果的に英語を学ぶ環境と言えます。

市長 子どもたちには、中学校卒業までに英語の会話力を身に付けて、グローバル社会に対応できるようにしてほしいです。

グローバル社会を 生きている子どもたちへ

市長 これからさらに社会のグローバル化が進みます。未来を担う子どもたちへ期待することはあります。

直山 これから、人種や国境を超えた交流が加速すると思います。今の小・中学生が大人になった時には、



研究授業に参加する直山さん

現在とは全く違う世の中になっているのではないだろうか。環境問題や社会問題などの課題も顕著になり、世界中の人と手を携えて諸課題に向き合わなければならぬでしょう。その時に、世界の広くさまざまな地域で使われている英語をツールとして持つていければ、世界中の人とコミュニケーションが取れます。英語を身に付けて、グローバル社会を渡り歩ける人材になってほしいです。

市長 市内でも外国人市民が増加するなど、外国人やさまざまな文化と接する機会が増えて、英語は日常生活でも身近なものとなっています。

上尾市は、小学1年生から英語教育を取り入れ、県内でも先進的な取り組みを行っています。小中学校で一貫した英語教育で、子どもたちが自然に英語と触れ合い、進んで英語を話せるようになることを目指してまいります。

本日はありがとうございました。

